



原子力発電所



雲地草夫

原子力発電所

今の日本に、エネルギーは足りているのだろうか？名前を失念したが、ある学者はエネルギーが不足すると人間がばたばたと死んでしまうといった。風が吹けば桶屋が儲かる的な論法で説明することができる。電力エネルギーが不足すると化学肥料が十分に作れなくなる。すると日本で農作物が十分に作れなくなる。すると日本人が十分に栄養を取れなくなる。すると日本人はばたばたと死んでしまう。

このような現象は実は当たり前になっていたことなのだ。日本では大昔から大飢饉を数えきれないくらい何度も経験してきた。大飢饉は火山の爆発や異常気象などで、日照時間が大幅に不足したときに起こる。日照時間が減るということは、地面に十分な太陽エネルギーが届かなかったということにほかならない。つまりこれもエネルギー不足の一例なのだ。ちなみに干ばつも大きな飢饉を引き起こすことがあるが、地域が限定されるために、米のストックを融通してある程度しのぐことができたようだ。

さて3.11の大震災以後、日本では原子力発電所をほとんど止めてしまった。日本の原子力発電所は日本の電力の半分近くをまかなっていた。70年代後半から80年代前半にかけての一億総中流社会を支え、80年代後半から90年代前半にかけてバブル景気を支えたエネルギーだ。日本のど派手な電飾と大音響を撒き散らしたエネルギーだ。電気はまだまだあるからバンバン使えという社会だった。

その電気を止めてしまった今、何が起こったのだろうか。まず最初の輪番停電で、延命装置に頼っていた障害者の方々の尊い命が止められてしまった。大勢の命が失われたことは事実だが、そのことで後に残された者たちはかろうじて生きながらえることができた。エネルギーは足りている足りているという者がいるが、実際は「足りていると思えば足りている」ということなのだ。つまり、原子力発電所を止めてしまったことで産業全体のパイが小さくなってしまったのだ。たとえば、水泳プールがあったとしよう。温水シャワーがあるとないとでは、もっといって暖かい風呂があるとないとでは、客足が大きく違って来るだろう。エネルギーの節約のために温水シャワーが止められてしまうと水泳プールという施設ではお金を稼ぐことができなくなり、産業自体が成り立たなくなってしまう。そしてひとつの産業が消えてしまうということは、パイが小さくなるということだ。

産業が減る、すなわちパイが小さくなると、人間のやる仕事が減るので、会社に余剰人員が増えてしまう。その結果、会社員はリストラにおびえて、しのぎの削りあいをする。しのぎを削ることによって、また多くの人間の命が失われてしまう。結局、エネルギーが減ると人間が死んでいくというのはそういうことなのだろうと思う。

ではどうすればいいのだろうか。原子力発電所を止めて良かったこともある。これ以上の放射性廃棄物を出さなくてすむことや、都市部の異常なヒートアイランド現象を止められるということだ。これ以上ヒートアイランド現象が悪化すれば、今度は皆、夏は冷房の効いた家に閉じこもって遊びに出て行かないだろう。これは明らかにパイを小さくする行動だ。電力エネルギーが増えすぎるとかえってパイを小さくすることになるだろう。

目指すところはソフトランディングしかないと思う。全員が電気製品を徐々に徐々に省電力のものに買い換えて、電力消費量を減らしていくしかないだろう。電気代が高くなったことはマイナスなことばかりではない。それによって日本人全員が節電意識を持って電気を融通しあえば、どこかに落ち着く場所があるのではないかと思う。